

青森県佐井村牛滝のオコモリについて

古川 実¹⁾

The Report of the Okomori ritual in Usitaki,Sai-mura,Aomori prefecture

Minoru KOGAWA

Key Words : 正月行事 篠もる 神去来 当番制 性別年序別組織

はじめに

青森県下北郡佐井村牛滝の伝統行事として行われている「オコモリ」は、近年、下北地方の年末の風物として定番化して報道等がなされている。牛滝の男たちが年末と正月に神社に集まり威勢よく膳を食し、給仕する側は強いて食べさせるという珍しい行事である。しかし、ニュース映像による断片は知られているものの、この行事の準備段階を含む全体像はあまり知られておらず、民俗調査報告も少ない。

本報告は、牛滝のオコモリ行事の全体像を記録しようとする作業の中間報告とし、儀礼的側面とこの行事から窺える牛滝における社会伝承の特色とを整理し、今後の課題等も提起しておきたい。

1 牛滝の概況

牛滝は、下北半島西端のほぼ中央部に位置し、陸奥湾、津軽海峡に面し、牛滝川に沿ったわずかな平坦地に集落が立地する。現在（平成22年時）の世帯数46、牛滝港登録漁船計65、うち3トン未満44（佐井村ホームページ平成22年度村勢データ）。前沖での漁業を主生業としている。

『佐井村誌下巻』（昭和47年発行）によれば、17世紀後半ごろから史料に牛滝湊（田名部七湊の一つ）の地名や村名の記録があるという。「邦内郷村志」に家数20と記され、檜材の積み出し湊として栄えた。元禄年間（1688～1704）、地元の廻船問屋坂井源八が氷見光禪寺の建材を用立てたことは有名である。盛岡藩遠追放地の一つでもあった。

牛滝の産土神社は、牛滝神明宮。「新撰陸奥国誌」（明治9年編纂）には、正徳6年（1716）の棟札があったと記されている。例大祭は新暦8月16日で、地区住民による神事が行われ、若者組による神楽御輿の地区巡回と各所で行う獅子舞の門打ちが祭礼の中心となる。地区内には、他に弁天、金比羅、稻荷を祀る。牛滝の寺行事が行われる場として、無住の真如庵がある（地元ではテラと称する）。佐井長福寺（曹洞宗）の末庵となり、田名部海辺三十三観音靈場の28番寺である。

2 オコモリの内容

（1）行事日

新暦12月15日と翌年1月15日の夜に行われる。太平洋戦争後の20年代ごろまでは、旧暦で行っていた。

（2）場所

神明宮拝殿。間口6間奥行3間の広さがあり、畳敷き。左右に1畳分の囲炉裏がある。平成7年の神社新築の際に、拝殿を畳敷きにしたが、オコモリのために囲炉裏を設けることとした。それ以前は、板敷きであった。料理の準備は、現在、牛滝地区交流促進センターで行っているが、以前は神明宮参道階段脇の旧集会場で行った。

（3）行事の当番

オコモリの当番は、1月3日の地区総会で決められる。1月の当番と12月の当番の各2軒が家並順で決まる。オコモリの執行は準備も含めると1年かかって行うこととなり、当番家の家族・親族あげての行事執行となる。行事当日の神明宮にあげる供物、膳の用意、料理とその具材の用意など、ムラからの支出と各家からの食材の拠出があるものの、労力等は当番でまかなうこととなる。

神事であり、不幸がある家は当番の順からはずされる。参考者も不幸があった場合は、ふた七日すぎまで参加しない。

（4）由来

オコモリ行事の由来譚として2つの説が伝承されている。すなわち、鯨が死んで港口を塞ぎ、北前船が出入りで

1) 青森県立郷土館 学芸課副課長

きなくなったため、神明宮に籠もり祈願した。1月15日に鯨が浮き、船の出入りができるようになったという話。もう一つは、不漁続きでムラが食料不足になったことがあり、漁があるように祈願のため籠もった。1月15日に鯨が寄り、それを捕ることができムラが救われたという話である。

12月15日は願掛けで、1月15日は願がかなった日であり、男が籠もっている間、女が食べるものを運んだ。そのことを再現しているのがオコモリだという。鯨は、かつてよく港に迷って入ってきたもので、良い漁になったのだという。

(5) 当日の準備

当番家の主人（男）は、神明宮祭壇にお供えをし、参集者を待ちながら、拝殿にいて炉の火をみる。供物は、大錫に入れた御神酒2つ、大きなシトギを2つ入れた重2つと、大きなおはぎを5つ入れた重1つ、大豆と米を炒ったものを入れた重1つである。おはぎは、もとは子供に配るもので小さくして数多く作ったが、最近は子供があまり食べないので、大きくまとめて作り、大人の夜食用になっているという。大豆と米を炒ったものは、いただいたものを取っておき、海に出てガスが掛かって前が見えなくなったときに、これを撒くとガスが晴れるといわれている。炉の火床には、浜の小石を拾い集めて敷き、木炭を燃料とする。12月の当番が小石を洗い敷くことになる。1月の当番にその負担は無いが、その代わり厳しい寒さの中、拝殿に泊まることになる。

オコモリに女性は参加できないものとされ、拝殿に出入りできる女性は、当番家の手伝い人だけとなっている。

(6) 料理の準備

料理はセンターで行われる。当番家の家族・親族の女性たちが下拵えし、当日の夕方ころから料理に取りかかる。オコモリ1回分の料理の材料は、供物のシトギとおはぎ用に各梗米1升。膳には、たくあん、ゼンマイの辛子和え、八杯汁、飯が付き、それを人数分作る。飯として米8升分、これは各家を回って米を集め。おつゆは干しマイタケのもどし汁と鰯出し汁のすまして、味噌のたまりで味付けする。椀種は豆腐、マイタケ、干しノリである。豆腐は100丁分必要で、これはムラからの支出がある。干しマイタケ、干しノリは、季節ごとに採っておき保存する。辛子和えにするゼンマイも山に入って採っておき保存したものである。近年は、マイタケが少くなり栽培ものを買うなどしている。

かつては、食材は自給であり、豆腐、味噌も自家製のものであった。米、大豆も貴重な食料で、これは各家から茶碗一杯ずつ集めたものだという。

(7) 行事次第

夕方、4時ごろから当番家の主人2人が囲炉裏に火を付け、祭壇に供物をあげる。頃合いを見て、交替で家に帰り、風呂に入り着替えて来る。

18:00ごろ

子供も含む男たちが拝殿に集まってくる。当番は酒を出したりして参集者の接待をする。かつては、年配者が上座に座り、下の者は静かに姿勢を正していたものだという。

19:00ごろ

中学生くらいまでの子供が神明宮鳥居前から山手と海手に分かれ、年長者の指図を受けながら神楽に使う締太鼓をたたきムラを回る。触れ太鼓という。調子は小さい頃から付いて回っているので、自然に覚えてしまう。

20:00ごろ

再度触れ太鼓を行う。これが聞こえると、若者たちがセンターから料理を拝殿に運びこむ。女手も一緒にあがり、拝殿左隅で配膳等の準備をする。

20:30ごろ

一番膳。当番が神前に向かって左側に壁に沿うように参集者を座らせ、当番2人で一人一人に御神酒としどり、米と豆を炒ったものを配る。参集者はそれをいただく。一番膳は年配者がいただくのが順となっているよう、若者たちが膳を揃え、膳の向こうに給仕役として控える。御神酒と供物が全員回った後、当番が「それでは皆さん、お箸をとってください」と声をかける。これが合図となり、めいめいが料理を食べ始める。「飯」「汁」「辛子」

「たくあん」などと大声を上げて椀を箸でたたいて催促し、給仕も強いて食べさせようとする。椀を蓋で閉じるまで給仕し続ける。神事の供物と同じだから、出されたものは食べ残してはいけないものとされている。食べ終わつた者には、飯椀にお茶を注ぎ、それを飲んで終了となる。

かつてオコモリの膳に付く者は、各家の主人1人と小学生だけであった。各家では、若い者にも覚えさせるために、代理として若者を出した。それで自然に年配者と若者の区別ができる、年配者から膳を食べ、最後の膳を若者が食べるという順になっているという。女たちの手伝いへの膳は、正式な行事には含まれない。

21:30ごろ

二番膳。一番膳が終わり、次の膳の用意ができると二番膳となる。一番膳と同様の流れとなるが、まだ食べて

いない者が膳につくので、今度は若者が食べ、給仕は年配者が行う。牛滝の戸数が多かったときは、三番膳まで行ったものだという。

22:30ごろ

女の手伝いの膳。二番膳が終わると当番は、手伝いのため控えていた女手に対し、拝殿の右側に膳を用意し、御神酒としごを分けて配り、料理を振る舞う。給仕は若者が行う。

23:00ごろ

膳の振る舞いは終了し、片付けをする一方、居残る者は酒を飲んで時間を過ごす。当番は拝殿に泊まる。

翌朝は6時に女手が来て、改めて膳・椀の片付けや拝殿の清掃となる。当番が祭壇前の戸に施錠して行事が終了となる。なお、膳・椀は朱塗りの漆器で、箱には「奉納 昭和癸酉 八年旧十二月十五日 木下タカ」と記されている。

3 牛滝のオコモリ行事の特色

(1) 祭祀対象について

参籠、お籠もりは、神事仏事執行に伴う精進潔斎のための行為として全国的に行われており、日本の神送迎に際して行われる儀式や、神仏に祈願する際の儀式の基本的な形式である。民俗行事として行われる「籠もる」行事は、本県では南部地方に多いようである。

南部地方でオコモリと称されるのは、獅子舞の獅子頭が神格化した権現様と呼ばれる神様の年取りの行事であることが多い。夜、権現様を管理する家に関係者が参集して飲食をともにし、獅子舞、神楽が奉納される。

十和田市洞内では、1月14日がオコモリで、別当と呼ばれる家（先祖が山伏であったという伝承を持つ）が村（旧大深内村）の鎮守にあたる豊良八幡宮から権現様を迎え、別当家で持っている権現様とともに祭壇に祀る。夕方、洞内の各家から参拝者が集まり、時間が来ると神事を行い、神楽の奉納が行われる。昔は明け方まで演じられたものという。神楽奉納の後に直会となるが、10年前は別当家で用意した精進料理を食べたという（『青森県祭り・行事調査報告書』 平成19年発行）。

類似する事例として、東通村の能舞を挙げておきたい。12月から若者たちが集会所に集まり、内習いといって、能舞の練習を始める。ムラごとに期日は異なるが、正月中に権現様を捧持して、ムラ内の門打ちを行うとともに、ムラ人を招待して、夜中芸能を披露するのである。権現様の捧持に際しては、精進潔斎をする必要があるという意識が強く、現在も肉食を禁じる若者集団がある。

いずれも、正月の行事として権現様の祭祀を行い、それに伴って精進潔斎をするという内容である。牛滝のオコモリは、大正月を挟んだ前後の行事であり、正月の一連の行事と考えるのが妥当であろう。その点、前2事例と共に通るものと考えるが、牛滝の場合には、祭祀対象として権現様のような具現化したものが認められない。祭壇奥に黒塗りの獅子頭があり、祭礼では神楽の獅子舞に捧持される獅子頭であるが、オコモリでは特別に祭祀されることはない。拝殿で行われることから産土様の神明様を祀ると理解するのが自然であるが、オコモリでは、神明様への特段の祭儀はない。

(2) 神の去來について

牛滝のオコモリが12月と1月に2回行われ、それは一連の行事であることが由来伝承で説明されている。鯨の出現という事件とその前後のムラの状況変化を説明しているのであるが、オコモリはその始まりと終わりに当たっている。これに類似する民俗行事の由来として、次の事例をあげる。

牛滝に隣接する佐井村福浦では、産土社の稻荷神社の神が10月29日に出雲に出向くので、その日は海に向かって神楽で神を送る。11月30日は出雲から神を迎える日で、前日の29日は、お籠もりのためムラ人は神社に泊まり込み、30日の朝、神楽会で神楽を舞いながら浜辺でお迎えする（『青森県史叢書 北通りの民俗』平成14年発行）。

この事例は近接地での事例であり、牛滝のオコモリを考える場合には重要であろう。鯨の出現を神の出現や去來として理解できそうであるが、行事時期の問題がある。周辺域に神去來に関するどのような事例があるのか、さらなる類似事例の調査が必要である。

(3) 強飯儀礼的な内容について

牛滝のオコモリで最も注目されるのは、強飯儀礼的な内容であろう。膳椀に飯、汁を盛り続け、食べる側も無理にでも食べようとするのである。民俗研究の上では、古来、供物や晴れの食事として供される高盛飯等の形式が残存し変化して、何杯ものお代わりを強いることが行われると解説される。本県では、籠もる行事において強飯儀礼的な内容を伴う事例は、牛滝のオコモリの他に知られていないものと思われる。昭和23年、剣吉小・中学校発行の『大銀杏第二号』に掲載された次の事例が類似するものと考えられるが、さらに調査が必要である。

「北川村で（筆者略）十和田さまを参詣した人びとが集まる「たう」で、正月、4月、7月、12月の15日で年4回行われた。行う場所は宿といって、仲間の人達の家をぐるぐる廻り即ち輪番制であった。（筆者略）虎渡では各人5合ずつのモチ米を持ち寄り、それで大きなお供えを作り神様にお供えしてから後、みんなでそれを全部食べ終わらなければ家へ帰れられぬというような面白いこともあったそうです（筆者略）」（『青森県史叢書 馬淵川流域の民俗』付録「大銀杏第二号」 平成9年発行）。

この事例は、南部町（旧名川町）での太平洋戦争直後の調査報告である。「たう」は講行事の当地での呼称である。講行事ではあるが、大盛りの供物と強飯儀礼的な内容が窺える事例であり、本県にあってもこのような行事がかつては広く行われた可能性がある。

（4）社会伝承の面から

下北地方のムラ組織については、性別年序別組織（年齢階梯制）が強いのが特色であり、特に祭礼執行に当たっての役割分担に、その組織原理が顕著に示されるとされる。牛滝においても性別年序別の組織原理が認められ、神事は男が執行し、テラ行事は婆連中と呼ぶ各家の主婦による組織が執行する。祭礼時は、地区総代と神社委員が監督的な立場となり、神楽や獅子舞の門回りは、若者組が主体となる。オコモリにおいても、一番膳、二番膳の順は年序による秩序が働いているといえよう。

ただ、性別年序別組織に併行して、家並順による当番制があることを看過することはできない。牛滝では、オコモリ行事のほかにも、春の例祭、夏の例大祭においては、行事の世話役として当番が順に回る。これはテラ行事においても同様で、家並順に当番が決められている。牛滝あるいは下北地方におけるムラ組織の様相については、さらに詳細な調査が必要と考える。

4 今後の課題等

牛滝のオコモリ行事を記録作成しようとする過程で、前項に挙げたような個別的な問題点等に気付き始めたのであるが、改めて民俗の記録作成は何を目指すべきか問い合わせ直す機会ともなっている。オコモリ行事に絞って、映像も含む記録作成を目的としたものの、結局は牛滝の民俗誌とでもいい得るものが必要である。

また、オコモリ行事がテレビで放映されることが、今後どのように行事の存続に影響していくのか、追っていくことも必要と考える。それは、民俗の記録作成がこの行事にどのような影響を与えるのかを考えることでもある。

この調査は、青森県民俗文化財等保存活用委員会による青森県無形民俗文化財等保存活用事業の一環として行われたもので、平成25年1月15日のオコモリ行事を中心に記述した。調査内容を本紀要に掲載することを許可していただいた青森県民俗文化財等保存活用委員会に対し、記して感謝の意を表するものである。

引用・参考文献

- 青森県史編さん室（1999）『青森県史叢書 馬淵川流域の民俗』
- 同（2000）『青森県史叢書 北通りの民俗』
- 青森県文化財保護協会（1965）『みちのく双書第18集 新撰陸奥国誌 第4巻』
- 佐井村（1972）『佐井村誌下巻』
- 桜庭俊美「おこもり」（青森県教育委員会（2007）『青森県祭り・行事調査報告書』）
- 竹内利美編（1968）『下北の村落社会』



祭壇上の供物



神酒とシトギを分ける



一番膳の配膳



二番膳



手伝いの女たち



当番は拝殿に泊まる

